
ホテルは泊まらない

ひとやすみ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ホテルは泊まらない

【Nコード】

N1334A

【作者名】

ひとやすみ

【あらすじ】

1204号室〓?1203号室〓?1202号室〓?1201号室〓?1104号室〓?1103号室〓?1102号室〓?1101号室〓?おすすめポイントなし

ホテルは泊まらない 1 (前書き)

1204号室=? 1203号室=? 1202号室=? 1201
号室=? 1104号室=? 1103号室=? 1102号室=?
1101号室=?

おすすめポイント なし

ようこそ。どうぞいらっしやいます。

ホテルは泊まらない 1

『ホテルは泊まるものじゃない。暮らすものだ。』

1102号室

気分は最悪で。

ナベは、ぐったりとベッドに沈んでいた。なぜか。買った女が変態だったからだ。

『あんただって、その気だったくせに』

別れ際にそう吐き捨てて、女はきっちり要求した額をむしり取っていた。ムチで打たれて、蠟を垂らされ、ナベの身体は疲労していた。心も疲弊していた。

明日は仕事だというのに。

出張で泊まることとなった、このホテルは高級で知られている。経費で泊まれてラッキーだ。が、失敗した。買う女もケチるべきじゃなかったか。

疲労はナベを優しい眠りへと誘っていく。

高貴な部屋の外装、ふかふかのベッド、ムーディーな照明。せっかくの演出も、今のナベを高揚させなかった。ただのお飾りだ。眠いんだ。ただひたすら、睡眠という欲求だけが彼を支配していく。そのときだった。

「……なんだ」

暗い窓の向こう。外に、

ゆらゆらと靡いている。ナベは何故か惹きつけられて、起きあがる。

「……………」

こうして、世にも艶めかしい物体と彼は出会った。

1204号室

何処の世界にも闇医者という輩はいる。

ピエールもそのひとりだ。

「駄目だね」

「……駄目とは？」

「切断するしかない。」

「なんだと」

たとえ闇医者といえど、医者に『駄目』と言われれば相当のストレスだ。しかも切断とは穏やかでない。

「肘から前腕を切り落とす。これしかないんじゃないかな」

「切らないで済む方法はないのか」

「だって、すでに壊死しかかっている。思い切って、すばっとやっちゃった方がいいぜ、これは。な？」

「うむ」

「んじゃあ」

「あ、待て！」

ピエールが、懷からぬつとノコギリのような器具を取り出したので、慌てて制止する。

「なんだよ。怖いのか？」

「……………」

自宅で傷を負い、そのまま此処へ直行した。そして、街で唯一知っている、このインチキくさい闇医者呼び出したわけだ。

「旦那は世間じゃ、なんて呼ばれてるんだっけ？」

「……熊」

「おうよ。その『熊』さんが、これくらいのことではびってどうするよ？ 腕一本くらいなくなっただって、駄目になる器じゃないだろ？」

ウィーン、と虫酸の走る機械音が始まる。

「覚悟」

「……あ、待つ」

悪夢の始まりだった。

1202号室

器用さには自信がある。

つもりだ。

和香子は腕時計と睨めっこをしていた。洒落たホテル。唯一気に入らないのは、壁に掛かっている幼児の絵が不気味なことくらいか。まあいい類は愛らしいのだけど、細めた目が何となくいやらしい。邪気がある。

待ち人きたらず。

ベッドは振り袖が陣取っている。お見合いというやつを、これから和香子はする予定だ。この派手な振り袖は、奮起した母が用意したものである。着付け教室にも通ったというから呆れる。

「…もう」

約束の時間はとうに過ぎているというのに、母が来ないのだ。携帯電話も持ち歩いていないから、連絡もとれない。ホテル内の日本料理店が会場、といっても油断はできない。遅れるのは避けない。既に襦袢を身につけていた彼女は、振り袖に手を通してみることにした。なんとかやれそうだと思ったからだ。細い紐を巻き付けるまではよい、問題は帯だろう。この悪趣味に照ら照ら光る帯を、いかにして操ればよいのか。

「ながい。おもい。」

子供みたいに屁理屈を呟く。えいや、とかけ声をかけたところで、部屋の電話が鳴った。

よりによって、この状況で……

和香子は後ろ手で帯を押さえたまま、受話器を取る。母からかもしれない。

「はい」

『あ、あ、ああ』

「……もしもし？」

『あつ、ああつ』

「は？」

『う、うう』

「……………」

和香子は無言のまま受話器を置いた。

一体なんだったんだろ。ただの変態電話か。気持ちが悪い。

「もお」

出ただけ損した。抑えたままの後ろ手が、しびれたように痛む。

どうしてこんな思いをしなきゃいけないのか。誰かの陰謀か。

どうしようもなく、どうしようもない気分になって、和香子は帯から手を離れた。

ぱさり、と繊細な音を立てて、黄金の帯は綺麗にクリーニングされた絨毯を転がっていく。

「……………」

また電話が鳴ってる。

出るつもりは毛頭ない。

1103号室

アイツを殺した。

罪悪感は微塵もない。

「ははっ」

乾は祝杯を挙げた。

過剰に振動を受けたビール缶は、白い泡を吹き出す。普段なら、とても飲めたものじゃない。でも、今だけは格別の味に感じた。テレビの電源をつける。

さあ、いつごろ出るだろうか。今日は無理かもしれない。明日の早朝か。

『やめてくれ、な、なんでもするから』

アイツは見苦しく命乞いをした。

よかった。わたくしが悪うございました、なんてしおらしい態度

を取られていたら、気分が悪くなっただろう。最後まで見苦しくて最高だった。あんな奴を殺したところで、悔やむ人間なんてひとりもない。万が一、自分がやったとバレたところで、世間はこっちの味方だ。自信がある。俺は無敵だ。

まるで呼応したかのように、電話が鳴る。

「…無敵だ」

乾は呟いて、軽い足取りで電話に近付き受話器を取った。

「もしもし」

『こちらフロントです。お客様、』

「……………」

乾は首を傾げる。それっきり言葉が途切れてしまったからだ。が、緊張したような息づかいが伝わってくる。明らかに普通ではない。

『おきやくさま、あ、ひゃ、百万円を』

「百万円？」

『払って、いただけないでしょうか』

「あ？」

唐突になんだ。

いくらこのホテルが高級だといっても、一泊で百万はないだろう。

『わ、わたくし、今、人質にとられてしまして』

うわずった男の声が伝えてくる。語尾に、ひっ、と息を呑む音が聞こえた。

『お客様が、百万支払うなら、殺さないと…』

犯人の要求？

「……………わかった。安心しろ」

『あつ、ありがとうございます、それでは今すぐに』

がちゃん

乾は薄く笑って電話を切った。

ばかばかしい。なにかの悪戯か、イベントの類か。

「なんだよ、今夜は」

グラスのビールは泡が消え、金色の液体が存在を主張してる。そ

ういえば、ビールは黄金色だ。目出度いじゃないか。テーブルに乗っている、黄金の液体を素通りして、乾はドアに向かう。

ノックが響いていた。

全く。こんなにやかましくドアを叩く奴はろくな奴じゃない。

乾は防犯レンズを覗く。

「……………」

舌打ちをする。今夜は何なんだろう。

乾の身体は震えていた。武者震いだ。

「すいません」

警察手帳を掲げた男が無骨に立ちつくしていた。

t o b e c o n t i n u e d

ホテルは泊まらない 2（前書き）

1204号室〓？ 1203号室〓？ 1202号室〓和香子 1
201号室〓？
1104号室〓？ 1103号室〓乾 1
102号室〓ナベ 1101号室〓？
おすすめポイント

・ナベが窓の向こうに発見したものは何か。
・
1204号室の主は何者か。また、その人物が負傷しているのは何
故か。
・和香子の母親が来ないのは何故か。
・乾
の部屋を訪れたのは何者か。
・乾の部屋にかかってきた電
話は、一体何だったのか。

ホテルは泊まらない 2

1103号室

そんなオモチャなんて、いくらでもある。

乾は警察手帳を掲げたままの男を観察した。上から下まで。

「あの、」

身丈は小さい。華奢だ。

「誰？」

「わたし、矢島といまして」

乾は結局ドアを開けた。

警察、と名乗り尋ねてきた男を部屋に上げたのだ。

「で、何の用ですか？」

思い当たりはあった。

存分にあった。なぜなら、乾は、ほんの数時間前に人を殺してきたからだ。

「……日本の警察すげえな」

「へ？」

もう嗅ぎつけてきたとは。

しかし、不思議と敗北感はなかった。乾は挑発的に矢島を見下ろす。

「変な電話がかかってきませんでした？」

「……変な電話」

「フロントの兄ちゃんが、人質がどうのとかで、」

「は？」

「なかったです？ うわあ、やだな。僕の部屋だけか？」

「……いや、ありましたよ」

「マジですか！？ よかったあ。なんだったんだろう、気持ち悪いですよー！？」

「何の用ですか？」

「え、だから、変な電話がなかった、かと」

矢島は訳がわからないというふうに目をぱちくりさせる。

乾は舌打ちをした。

「その警察手帳は？」

「ああっ、すいません。こうでもしないと、話を聞いてくれない
と思つて」

「……俺を追つてきたんじゃないのか？」

「え、えっ？」

よく見ると、矢島は変なアロハシャツを着ていた。しかも足はサ
ンドル履きだ。勤務中の刑事には見えない。

「やだなあ。僕、休暇で此処に着てるんですよ。捜査とかでなく
つて……ん？」

喋りながら、矢島が顔を顰める。

「追つてきたんじゃないのかつて……なんです？ なにか追われ
るようなことでもしてるんですか？」

「……………」

此処で当然のごとく、乾はノーと答えるはずだった。

大体の筋書きは決まっていたのに。まるで、ビールの泡みたいに、
乾の何かが吹き出した。とめどなく溢れた。

「実は、殺つてきた」

「あはっ」

「又兵衛を殺してきた。知らないか？ 指名手配中の」

「ああ！ あの、ネズミみたいな顔した一家惨殺事件の……」

矢島はそこで表情を変えた。

みるみる間に真っ青になっていく。

「あなた！ もしかして、生き残った長男の、」

マスメディアには散々露出した。

警察だという、この男が乾を知らないはずがない。

「本当に、又兵衛を殺したんですか？」

「ああ。ついさっきな。悪いか？」

俺にはその権利がある。

悪、だなんて少しも思っちゃいない。乾は不適に笑う。

「……悪いに決まってるでしょう」

「説教なら刑務所でしてくれ。ほら、逮捕したいならすれば？」

いかにも、ふざけた様子で両腕を差し出す。

「違いますよ」

「あ？」

「……せめて、休みが明けてからやってくればよかったのに」
矢島が拳を握る。

何かが変だ。そんな気がした。

「久しぶりの休み、高級リゾートホテル……ねえ、どう思います
？」

「どう思ってる」

「あーあ！ 聞かなきゃよかったなあ！ ねえ、よりによって、
どうして僕に自白したりするんですか！？」

「あ！？」

乾は腕を捕まれ責められる。

やっぱり変だ。こいつは何か変だ！

「あの」

「……なんだよ」

冷や汗が出てくる。

又兵衛を殺したときは、手汗もかかなかったというのに。

「なかったことにしません？」

「……………は？」

1102号室

かつて、これほどまでに色気に溢れ、上品で、それでいて慎ましい。
こんな存在の女がいただろうか。いや、いない。

手を伸ばす。

いやよ、と避けるように、誘うようにそれはヒラリと彼の指をかわした。その動きもまた優雅だ。

ナベは魅せられていた。

街灯のオレンジ色に照らされて、反射してキラキラ光る。ゆらめいている。

「綺麗だ」

漆黒と金色のコントラストが素晴らしい。ベランダに降りた様子は、まるで天から降ってきたかのよう。否、本当に天から降ってきたんだろう。

「……綺麗だよ」

掠った感触。絹のようだ。

引きつけて、思い切り、その感触を確かめてみたい。なのに、それさえも許さない高貴さが『彼女』にはあった。

あの、道端で拾った女。下品で粗野で変態で。ああ、吐き気がする。大間違いだ。早く忘れてしまおう。

もう名前をつけてしまった。絹江だ。

君の名前は絹江だよ。

『絹江』はそれに答えるかのように、その身を翻して滑らかに、開いた窓の隙間に入ってきた。ナベは感極まった。逃がさない、とばかりに『彼女』をしっかりと掴む。

「……！……！！」

空耳か。

どこからか声が聞こえた。叫んでいるような。

「出てきなさいよ！」

今度は、はっきりと聞こえた。

気のせいではなかったようだ。はて？ 頭上からか。誰だ。

「ちよつと待っててね」

ナベは絹江を愛しげに見つめる。そしてベランダへ出た。

「返しなさいよ！」

「？」

キンキンした怒鳴り声。ナベは、野球でフライを捕るときのように、首を90度に曲げて見上げた。

「こらっ！」

「ひっ」

思わず悲鳴が漏れる。

髪を振り乱し、もの凄い形相をしている。まるで山姥だ。

「あたしの帯、返しなさいよ！」

女がナベを見下ろしていた。

1204号室

ぴちゃん

水音が反響するバスルーム。白いバスタブと金色の脚が妖しく存在している。檜の風呂桶でも見れば、健全な気持ちになれるのだろうか。

「旦那」

呼ばれて、ゆっくりと振り返る。ピエールが腕を組んで立っていた。

「まだ、間に合うぜ？」

「……………」

「病院に行けば、の話だ。」

多量出血した左腕は、もはや人間の肌色でない。壊死しかけている。闇医者ピエールもそう言ってたではないか。

「病院には行かない」

「……なあ旦那」

長いため息をつく。

まだ、身体のだこも失ってはいない。切断すると決まった腕が、惜しいわけじゃなかった。単に怖じけついただけだ。

「俺は旦那が好きだ」

「……気持ちの悪いことを」

「見逃してくれ。あんたに惚れてんだ。よって、俺は、旦那に辛い目にあってほしくないと思ってしまっわけ。」

「ゆっくりと立ち上がる。かつてないほどの、酷い立ちくらみがあった。」

「辛い目にあってほしくないなら、切断せずに、お前が何とかしろよ。医者だろう」

「……悔しいけど、それは無理な話だ。が、」

ピエールに肩を貸してもらっているようだ。もはや、それさえも朦朧としてわからない。ソファに座らされる。

「切った腕を元に戻すことはできるかもしれない。」

「元に戻す？」

「保証はできない。かなり先の話になるかもしれない。けど、どちらにしても早く切っちゃったほうが都合がいいんだ。病院へ行く気はないんだな？」

「……やれ」

ピエールが注射針を用意している。麻酔か。

最初から使ってくればよかったのに。さては、本気で切断する気などなかったのかもしれない。よくわからない奴だ。

「なあ、教えてくれよ。誰にやられた？」

「……………」

「まあ、いわなくてもわかるよ。あんたが庇う人間なんて限られてる。」

うるさい。早く。

「美濃さんだろ？」

「……うるさい」

うるさいうるさい。ピエールも、電話も。

そう、部屋の電話が先ほどから際限なく鳴り続けている。

「出る」

「電話？ 放っておこうぜ。第一、あんたが此処にいることは誰

も知らないはずだろ？」

黙ったまま闇医者をにらみ付ける。

「…へいへい」

ノコギリのような器具の機械音がやんで、ピエールが電話に出る。

「は？ 百万？ なにいつてんの？」

「おい」

「知らねえよ、そんなの」

「おい、どうした」

普通でないピエールの応対に驚いて聞く。

「旦那、いたずら電話だ。誘拐がどうのとか、メチャクチャなことを言ってるやがる。」

「貸せ」

腕を伸ばして受話器を奪い取る。

「……………」

しかし、耳に付けようとした瞬間、通話は途切れた。

「旦那、もう腕が」

「今の」

直接ではないだろう。受話器の、少し離れた位置から発せられたような感じ。

「門脇の声に似ていた。いや、本人だ。」

「かどわき、って……官房長官？ うっそ」

まさか、と思い直す。

今の、この時期に門脇が、こんな場所に来ているはずがない。

「んじゃ、よくわからんけど、とりあえずやっちゃいますか？」

「……うむ」

どうしようもなく思考が散る。すべてが有耶無耶になっていった。そうだ。

美濃のことだけ、思っていればいいか。

to be continued…

ホテルは泊まらない 2 (後書き)

さて、だんだん怪しくなってきました…… (汗)

ホテルは泊まらない 3 (前書き)

1204号室〓？ 1203号室〓？ 1202号室〓和香子
1201号室〓？
1104号室〓矢島 1103号室〓乾
1102号室〓ナベ 1101号室〓？
おすすめポイ
ント
・1204号室の主は何者か。『美濃』、『門脇』
とは何者か？
・和香子の母親が来ないのは何故か。

>・乾の部屋にかかってきた電話は、一体何だったのか。

ホテルは泊まらない 3

1202号室

「きゃあああっ」

「和香子は悲鳴を上げる。

「いやあっ！」

「……うるさいな」

男は下からはい上がってきた。比喻でもなんでもなく、壁とベランダの柵を伝って、和香子の部屋に上がってきたのである。

「そっちが来い、っていうから来たのに」

研ぎ澄まされた敏捷そうな体格。

精悍、という言葉がぴったりの要望をした、その男の手には和香子の求めているものがあつた。

「お、帯……私の」

新品の袋帯。

気が付いたときには消えていた。ベランダの下へ落ちていく、その一瞬の尾を目撃して、下の男に呼びかけたわけだ。

「貴女のものなのか？」

「そうよ！」

「……なんでそんな格好をしている？」

はっ、として和香子は振り袖の襟元を手繰り寄せる。

「お見合いがあるからよ」

「見合い？」

「な、なんで窓から」

「……ああ、なんでかな。絹江の降りてきた道を辿ってみたかったから。」

「きぬえ？」

やだ。

なにを言ってるんだろう。意味がわからなくて、和香子の恐怖は増す。男の陶然とした表情は、まともな人間のものじゃなかった。まるで、麻薬常習者のような……

「とりあえず返して。そして出ていって」

「……………あんたの見合いなんかの為に、絹江が」

「ちよつと、頭大丈夫？ ぎゃ」

帯を奪い取ろうとすると、強い力で振り払われ、和香子は尻餅をついた。

「なあ、これ、俺にくないか？」

「なに考えてるの？ 駄目よ」

「金なら払うから。今は無理だけど、後に絶対」

「私はそれが必要なの！」

必要なのだ。

どうしようもなく必要なのだ。

「返しなさい！」

「あ、絹江！」

力一杯男の臍を蹴る。崩れた隙に、帯を引っ張った。

「ジョージを助けるの！」

「ジョージ？ もしかして、これはあんたにとっての『ジョージ』

なのか？ ああ、そうか、なるほど」

「わけわかんないこと言ってんじゃないわよ！ 私の恋人が誘拐されたの！」

かかってきた電話。

あの、怯えた声。助けを求める声。ジョージに間違いなかった。

「恋人」

「そうよ！ このホテルで働いてるの！！」

「でも、さつき、見合いするって」

「私はジョージだけなの！」

お見合いなんて、はなっからやる気はなかった。

相手には悪いけど、母にも悪いけど。決意が崩れないためにも、彼の働いているホテルを会場にしてもらったのだ。

「百万円はないけど、この帯はそれくらいの価値がある。きつと犯人も了承してくれるわ。」

「……絹江を引き渡すっていうのか!？」

「きぬえ、って誰よ!？」

「やだ! 絶対離さない!!」

「ぬーっ!」

綱引きのように、帯を引っ張り合う。

「絹江!」

「ちくしょー、絶対お見合い結婚なんてしないからーっ!!」

洒落たホテルの一室に、それぞれの怒号がこだました。

1204号室

「知ってます? 隻腕の美女の話」

「なんだそれ、怪談か?」

大切に保存します、とピエールは切断した腕をケースに収めた。

「違うよ。戦争を勝利に導いた女神の話さ。どうして、日本人てのはすぐ怪談にしたがるんだろうね。恐がりの証拠だ。」

「……なにが言いたい?」

「いや、なんも」

鼻歌を口ずさみながら、ピエールは処置をしている。不思議なもので、違和感はなかった。片腕を失ったというのにだ。

「これから麻酔がきれる。そしたら……ちよつと、いや、かなり痛いかな。モルヒネでも打っておこうか。」

「帰るのか?」

「どうしよっかなあ。旦那が、帰らないでくれって頼んでくれたら一晩でも一緒に居ますけどね。」

「帰れ」

「あ、冷たいなあ」

闇医者が高い鼻をポリポリと搔く。

「あのさ、旦那。美濃さんとは縁を切りましょう。いや、そこま
でしなくてもいいから、せめて別居しましょう」

明るい口調で指を立てて言う。

「あんなのと一緒にいたら、身が持ちませんで。ほら、前にも」
「うるさい。お前が美濃のことを口出しするな。」

「……旦那が面倒を見なくても、あの人を世話する人間はいくら
でもいる。」

「……………」

そんなことはわかってる。

だけど、それでも。自分は美濃から離れることはできないのだ。

「じゃ、帰っちゃいますよお」

「……ご苦労さん」

存在する方の腕をヒラヒラと振る。

ドアが開いて閉まる音がした。が、

「わ」

すぐにピエールは戻ってきた。

「なんだ？」

「旦那、外に」

くい、と親指でドアを指さして、ピエールは薄く笑いを浮かべて
いる。

「物騒な奴がいます。たぶん軍人です。」

「軍人？」

「ただものでないのは確かだよ。殺し屋かもしれない。」

「……なんだと」

「もしかすると、さっきのふざけた電話」

数十分前にかかってきた電話のことだ。

「本当だったりして？」

「ホテルマンが人質に取られてるって？ 誰にだ？」

「……さあ。でも、背後で門脇の声がしたっていうのは、かなり気になりますよね。」

門脇なら……

そういう筋との繋がりは強いはずだ。が、

「旦那、ここに来るまで誰かにつけられていませんでしたか？」

「ああ」

「絶対に？ 100%そう言い切れます？」

「……………」

医者はずぐに数字を使うから嫌いだ。

100パーセントなんて言い切れるわけがない。

「しかし」

動くと、かすかに傷口が痛んだ。

「なぜ門脇がホテルマンを人質に取るんだ？ しかも、私に百万円を要求するなんて、意味不明だろう。」

ピエールがおどけた表情で両手を挙げる。ピエロみたいだ。そういえば、こいつのあだ名の由来もピエロだったか。

「わからねーよ。もう一度脅迫電話がかかってくるのでも待ちます？」

「……………鳴ってる」

「え」

「私の携帯だ。スーツのポケットに入っているから持ってきてくれ」

「おっ、ほんとだ」

ピピピと断続的な着信音。

闇医者から電話を受け取ると、一つ咳払いをして電話に出る。

「はい」

t o b e c o n t i n u e d . .

ホテルは泊まらない 3 (後書き)

さて、ますます怪しくなってきました。
作者本人泣きそう
です。

ホテルは泊まらない 4（前書き）

1204号室〓？ 1203号室〓？ 1202号室〓和香子
1201号室〓？
1104号室〓矢島 1103号室〓乾
1102号室〓ナベ 1101号室〓？
おすすめポイント
・1204号室の主は何者か。また、その人物にか
かってきた電話とは？
・和香子の母親が来ないのは何故か。
また、ジョージとは何者か？
・乾の部屋にかかってきた電
話は、一体何だったのか。

ホテルは泊まらない 4

1103号室

「待てよ」

「やだ、帰ります!」

「お前、警察だろうが!」

乾は矢島の腕を引いて、部屋に引つ張り込む。

「ぎゃ」

「人殺しを野放しにする気か!？」

「だ、だって」

泣きそうな声で、矢島は床に腰をついたまま、手を挙げる。

「あなたも変ですよ、わざわざ逮捕して欲しいなんて」

「……考えが変わったんだ。俺は世間に公表する。」

乾はソファに座って、仰々しく脚を組む。

「家族の復讐を果たしたことを」

自宅にかかってきたのは匿名の電話だった。

数日前、テレビの特番に出演してから、乾一家惨殺事件の犯人、又兵衛の目撃情報は絶えなかったが、それは唯一信憑性のあるものだった。とにかく居場所を知った乾は、そこへ行った。又兵衛がいた。殺した。

「このまま黙っていても、どっちみち警察は貴女を疑いますよ」

「その前に、自ら自白してやるんだから手間が省けるだろ。その方が格好いいし。」

世間は乾に同情している。よくやった、と賛美するに違いない。

「でも、刑務所行きですよ?」

「いいさ」

ほんの数年くらい。

江戸時代では、仇討ちは合法ではなかったか。そう、敵を討ちは

日本人の美学だ。やったぞ、と大声で叫びたい。そうだ、そうだ。叫んでしまえ。

「こら！」

「ひい」

四つんばいでドアに向かおうとしてた矢島を怒鳴りつける。

「乾さん」

突然改まった様子で正座をした。

「僕はあなたの味方です！ あなたを逮捕したくないんだ！！」

「面倒くさいだけのくせに」

白々しい演技を、と乾は本格的に呆れる。休暇中の刑事というのは、みんなこんな風なのか。

「手柄が欲しいと思わないのか？」

「……そんなの」

何か言いかけて、矢島は止める。

悩むような仕草を見せ、胸ポケットから携帯を取り出した。

「上司に相談してもいいですか・」

「……………」

やはり腐っても警察。手柄という言葉には弱い。

乾は、黙ったままうなづく。ここで警察が押し寄せ、大々的に逮捕されるとしても同じことだ。いや、むしろ望むところだ。

「あ。藤野さんですか？　じつは……眠ってましたか、ああ、すいません、実はですね」ごしょごそ、とことの成り行きを説明している。乾は、放ってあったビールを口に含んだ。黄金の液体だ。ぬるいのも、また良し。

「……わかりました。休暇中にすみません、はい」

「済んだか？」

「はい。詳しい情報を聞いておけて」

溜息をつきながら、矢島は部屋に備え付けてあるメモ帳とペンを手に取る。尋問か。なかなか悦に入ってるじゃないか。

「いつ何処でやったんです？」

「午後5時過ぎ。警察も発見出来なかった場所、とでもいつておこうか。これ、嫌味ね。」「すみません……ま、いいや。どうやって殺したんですか？」

「燃やした」

「え、殺した後に遺体を燃やした？」

「違う。殴ったけど、まだ死んでなかった。その後に、納屋で下以後と燃やした」

「ええっ！」

「ぎよろり、とした目をさらに大きくさせて、矢島がコントみたい
に驚いた仕草をする。」

「放火殺人か……やばいかもなあ」

「何がやばい？」

「罪重いですよ。」

「懲役何年くらい？」

「……場合によりますけど、殺人の中では一番重い罪」

「3、4年くらいで済むんじゃないのか？」

「えっ……さ、3とか4は、ちよつと厳しいんじゃないのかなあ」
「なんだって。」

「いやだ。復讐したことは世間に知らしめたいが、長期の刑務所暮らしはやだ。」

「倫理に反する処罰だろ！」

「そんなこといわれても」

「どうにかしろ」

「そ、そんなあ」

「あ」

「乾は重大なことに気が付く。」

「お前、さっきのは間違いだと連絡しろ！」

「へっ？」

「上司へ電話しただろうが。嘘でも間違いでもいいから、とりあ
えずなかったことにしろ！」

「やつ、やですよ！　ただでさえ睡眠中に起こして、機嫌悪かったのに、嘘だなんていったら殺されます」

四角いフレームのメガネを振り乱して、断固拒否する。

「大丈夫ですよ！　あっちも、あまり信用してなかったみたいですし！　自慢じゃないけど、藤野さんに信用されてないんすよ、僕ほんとに自慢じゃない。

「だから、すぐにつかめに来るとかはないですから。そういや、ここの場所教えてないや。ははっ」

苦しげに笑う矢島を一別して、乾は窓へ向かう。外を見下ろす。確かに、警察の気配はないが。まだわからない。

「望くん」

下の名前で呼ばれて、乾は思わず反応する。

「君は若い。未来がある。」

「……………」

「なかったことにしよう？」

またそれが。

乾はうんざりして、頭を抱えた。まったく、どうしてこうなってしまうんだろう。原因は自分にあるのか。又兵衛が乾家を狙った動機。縁者どころか、知り合いでもない。動機は不明のまま。本人が死んだから、永遠に不明のままか。しかし、乾には心当たりがあった。たぶんあれのせいだ。

「……言わなきゃよかった」

乾のつぶやきに、矢島が大げさにうなづいた。

「ああ、聞かなきゃ良かった！」

フロントへSTAFF ONLY

「ふあ」

ビクリと身体が震えた。

「どうした？」

「あ、あの、お手洗いに、生きたいのですが」

情けないほど歯が奮えている。

後頭部に押しつけられている冷たい感触のせいだ。

「駄目だ。我慢しろ」

「…う、うう」

便所にも行けないなんて、基本的人権の侵害だ。

人間、いや、犬以下ではないか。

「このホテルの客は薄情だな」

背後から違う声が聞こえる。

ピストルを押し当てている男ではない、違うだみ声。

「誰ひとりとして、お前を救う気のある者はいないらしい。」

「…っ」

そんな。

ジョージは絶望的な気分になる。が、当たり前ともいえる。突然、他人の為に百万持つてこいと要求されて、払う方がおかしいのだ。わかってる。

「なんでこんなことに」

思わずひとりごちた。

聞こえたらしい、濁声が嗤う。

「恨むのなら、武者小路沢を恨むんだな。まあ、面識もないだろうが！」

むしろのこうじのさわ？

誰だ、それは。長つたらしい名前のわりには、面識どころか聞き覚えもない。

「会長」

スタツフォンリーのドアから、また違う男がやってくる。

角刈りに黒グラサン。まるで、やくざの手下だ。名前はサブとか？

「変な女がいます。金も持って来ず、ただ人質に会わせると」

「なに。こいつの知り合いか。」

一斉に視線を向けられる。

自分に会わせろ、という知人。まさか、彼女じゃ

「追い払え」

「それがなかなか頑固で」

「そんなものに手こずるな、サブ」

「おー！」

思わず歓声を上げたジョージ。

「なんだ、お前」

「ひっ」

ピストルを強く押しつけられ、小さな予感的中した興奮はすぐに冷めた。とらわれの身だった。

「あまりおかしい行動を起こすと、」

そのときだった。

ドアが乱暴に開け放たれ、一瞬の静寂が訪れる。

「あっ」

サブとその他が侵入者を取り巻く。

信じがたいことに、その侵入者は恐るべき豪腕で、彼らの攻撃を退けた。その手には、凶器が握られている。

「はあ、はあ、見つけた」

現れたのは息の荒いおばさんだ。

あれは、剣山じゃないのか。生け花で使うヤツだ。

「会長に何の用だ!？」

残りの男達が立ちほだかる。

剣山に振りかざしている初老の女、よく肥えた手の甲で、赤い口紅を拭った。

「違うよ、あたしはその男に用があるんだ」

喪服のような漆黒の着物。裾から出た象のごとき、脚で近寄ってくる。

まるで悪夢の光景だ。

「あんた、よくも」

ジョージの背後にいた男は、銃口を彼女に向けている。よって、

ジョージはピストルの脅威から解放された。

「人の娘をたぶらかして」

だから彼は、その、地獄からはい上がってきたような鬼女の敵を
確認しようと、後ろを振り向いた。

「？」

が、『会長』どころか、そこには誰もいなかった。奥の部屋へ避
難したらしい。

「許さないよ、蟹沢」

「え、えっ？ 俺！？」

「和香子は見合いするんだ！ こんなところまで邪魔するんじゃないよ！！」

「えっ、ええっ！」

鬼が迫ってくる。

ジョージの脅威はピストルから剣山へと移った。どっちがマシか。

「覚悟しな！」

「うぎゃあ」

そんなことを考えているヒマは勿論ない。

t o b e c o n t i n u e d ..

ホテルは泊まらない 4 (後書き)

古いワープロで打ってから、ここに清書してます。
とつても疲れます。

ホテルは泊まらない 5（前書き）

1204号室〓？ 1203号室〓？ 1202号室〓和香子
1201号室〓？
1104号室〓矢島 1103号室〓乾
1102号室〓ナベ 1101号室〓？
おすすめポイント
・1204号室の主は何者か。また、その人物にか
かってきた電話とは？
・フロントでは何が起きているの
か？
・乾の部屋にかかってきた電話は、一体何だったのか。

ホテルは泊まらない 5

1204号室

「よお」

蛙を潰したようなだみ声。

すぐにピンときた。

「門脇……」

呟きにピエールが反応する。なかば予想していた人物からの電話だ。ほっとしたような忌々しいような妙な気分になる。

「元気か？」

「わりと」

「そりゃあよかった。ふふふ」

「……………」

「そろそろ観念したらどうだ。犠牲者も少なくて済むぞ」

門脇の言葉に啞然となる。

「何のことだ？」

「この状況で惚けるか？ ああ、その部屋にはお前以外に誰かいるらしいな」

「どうしてわかる」

「電話に出たからさ。わかってるんだろう？ このオレが誘拐ごっこなんて、仕立ててやったんだからな。」

誘拐ごっこ？

ピエールと顔を合わせる。闇医者とは、ただ両手を挙げた。

「何のことだ？」

「……なに」

「本当にわからない。一週間前までの行動を思い返してみたが、お前にそんなことを言われる覚えはない。」

「……………」

受話器の向こうで険悪な空気。

長い沈黙の後、だみ声は僅かな深刻さを帯びて言う。

「美濃さまが誘拐された。お前の仕業じゃないのか？」

「な、」

「お前じゃないのか!？」

門脇のそれはまるで、『お前であれ』と願っているようでもあった。美濃が誘拐された？

そんなバカな。数時間前まで一緒にいたというのに。

「お前だろうが! ふざけるなよ、ブタ野郎め!！」

「落ち着け、門脇」

ふう、ふう、と荒い息づかいが聞こえる。

しかし流石に政府の幹部、切り替えも早く冷静に説明をはじめ。

「閣議の結果を報告しようと美濃さまを訪れると、すでに邸宅はもぬけの空だった。おまけに、お前がいない。となると、貴様のせいだと考えるのも無理ではないだろう？」

「……うむ」

「貴様は、此处を隠れ家みたいに思っていたかもしれないが、実際にはバレバレだ。すぐに目星をつけ、あぶり出す為に脅迫の電話をかけた。お前のやってることはお見通しだ、というメッセージ付きでな。」

「本当に私が犯人だと考えたいならしいな。バカが。時間が無駄になっただけだ。」

「それにしても、面白い偽名を使っているんだな。『武者小路沢』とは。貴様のセンスとは思えなくて、確認の為に必要のない部屋にまで電話をかけたぞ」

「そんなことを話している場合じゃないだろう」
とにかく合流しなくてはならない。

しかし、一体誰に美濃は連れ去られたというのだろう。門脇の罠か？ いや、官房長官がこんなふざけた狂言をするメリットはひとつもない。

だとしたら、やはり…

「…ピエール？」

目前にいたはずの闇医者が消えていた。

「おい、聞いているか『武者小路沢』？」

「なんだ」

「悪い情報が、たつた今入った。『本物』の誘拐犯からだ、美濃さまを返してほしければ身代金を払えと」

やはり。

交渉に金は付きものだ。問題は、

「いくらだ？」

ぐむ、と門脇が鳴いた。のどの奥から響いたような生理的に受け付けない音。

「本年度の国家予算額」

「……」

「イカれてると思わないか？」

まったくだ。

モルヒネが効いているはずの傷口がうずき始めた。

1202号室

「…うふふ」

はじめて一人暮らしをした学生時代。ある朝のことだった。

うっかり放置していた生ゴミ箱。

その蓋の裏に、びっしりと得体の知れぬ虫の卵が張り付いていた。

黄色い、何百もの、おぞましい命。

和香子は、ただ、それを機械みたいに片づけた。黙々と処理した。その直後に、綺麗に掃除したゴミ箱の横で、気絶した。

「あはは」

5分前。

彼女の部屋には男がいた。

男、といつても親密な付き合いをしていたわけじゃない。壁伝いに階下から彼女の部屋へ侵入してきた野蛮人だ。理由はまったく理解できない、する気もないが、男は和香子に振り袖の帯を渡すよう要求してきた。当然断る。

『きぬえーっ』

両者で引つ張り、もみ合いになつた結果、帯は12階の窓から地上へと舞つていった。それはとても鮮やかだった。天の羽衣のごとし。そして、男は羽衣を追つていった。

それだけのことだ。

『…死んでるよね』

無事であるわけがない。和香子が地上を見下すと、その男らしき物体が在った。出血がひどい。死んだ。

3分前。

『え、ええっ！？』

ここで信じがたい出来事が起きる。

黒服の男たちが現れ、男の体を運び去つていったのである。何処かへ。とにかく、野蛮な男の死体は消え去った。

さて、と。

和香子は頭の悪い女ではない。

このホテルで何かが起こっているらしい、というのは確かだ。

あの、脅迫まがいの電話。おそらく、フロントは乗っ取られている。これだけの規模のホテルを占領するのは、単独犯じゃないだろう。

大勢……組織だ。素性はわからぬ。死体を運ぶ手際の良さといい、プロの連中であることは間違いない。

つまり、こうは考えられないか？

12階から飛び降りた男は、現在進行中の誘拐事件に巻き込まれた一般人と判断された。黒服たちは跡が付かないように、死体を運んで消す。隠滅した。

「ふふっ、あははっ」

条件は揃っている。怖いくらいに。

和香子は男に直接は触れていない。男も和香子に直には触れていない。加えて、互いに名も知らぬ彼らに縁などあるはずがない。唯一の問題は、地上に舞い降りた天の羽衣だ。あれさえ回収してしまえば、自分の影は一切なくなる。面倒くさいことに巻き込まれずに済む。テレビアーン。

「ジョージ」

フロントで人質を取られている彼のが心配だった。

あの帯を早急に回収して、身代金代わりに出さなければ彼の命はない。気絶するのは、しその後だ。

「待ってて！」

和香子は下界へ向かった。

1103号室↓1104号室

矢島が逃げた。

あの、クソ刑事。乾は毒づく。

『僕は貴方が又兵衛を殺ったことは漏らしません。そうだ、アリバイ保証人でもなりましょうか！？ 犯行推定時刻、貴方と僕は此処で酒を呑んでいた。どーです？ 完璧じゃないすか。では、近いの祝杯でも挙げましょうか！』

良い酒があるんですよ、と自室へ取りにいった。が、戻ってこないのだ。

「おい」

ドアを叩いて、呼んでも応答しない。

ちくしょう。裏切りと見なした。

「開ける！」

乾はもてる脚力でドアを蹴る。ドン、ドン！

「ひ、ひい」

やがて、奇妙なうめき声とともにヤツが出てきた。床に這い蹲って、情けない体勢だ。

「お前、よくも」

「ち、ちち、違う、違います」

首をメチャクチャにふりながら、酒の瓶を抱えた腕を上げて見せる。

「部屋に入ったら、あ、あれが」

「……なに」

矢島が、あれ、と指さす方向。

高級な絨毯の上に何者かが蠢いている。あれは

「腕、ですよー!?」

びくん、びくんと痙攣する生命から切り離された片腕。人間の前腕だ。

「すいません、僕、腰が」

腰を抜かしたらしい。アホか。

しかし、そこではたと気が付く。仮にも刑事の矢島が、切断されたらしい腕を発見したくらいで腰まで抜かすのか。

「助けて、噛まれる!」

「?」

乾は『それ』を血管だと思っていた。

腕から伸びている細長い何か。グロテスクな紐。

「毒蛇だ!」

蛇!!

血の気を失った腕に嫌らしく巻き付くへび。

乾は強い嫌悪を感じた。

禍々しいとしか言いようのない混合物が、其処には在った。

t o b e c o n t i n u e d . . .

ホテルは泊まらない 5（後書き）

犯人、と入力したいはずがミスで、班員と変換されたとき、とても悲しい気持ちになります。

ホテルは泊まらない 6 (前書き)

1204号室〓? 1203号室〓? 1202号室〓和香子

1201号室〓?

1104号室〓矢島 1103号室〓乾 1102号室〓ナベ

1101号室〓?

フロント〓ジョージ

おすすめポイント

・ナベを運んだ黒服の連中とは。

・矢島の部屋に突如現れた腕と蛇は。

ホテルは泊まらない 6

1104号室

「や、やだ」

ヘナヘナと倒れ込み、刑事とは思えない刑事、矢島が縋ってくる。

「……ちよつと待て」

落ち着け。

乾は、切断されたと思しき腕に巻き付いたヘビを指している。たしかに恐ろしい光景だ。

「お前、毒蛇と言ったが、それは確かなのか？」

「え、だってこのエグい色といい顔つきといい、毒を持ってると思えないじゃないすか！」

「……適当にいいやがったな」

「ええつ、適当ってわけじゃ」

乾は矢島を睨みつけ、ひとつ深呼吸をする。落ち着け。

生気のない腕。チロチロと傷口を舐めている蛇。乾は生物に詳しくないし、こういう事態の対処法も知らない。が、この蛇が有毒であるうがなかるうが、下手に近付かなければ、危険はないだろう。

「矢島」

「なんすか…あつ、今ヘビが僕を睨んだ！ 絶対睨んだ！」

「これ、はお前のモノじゃないんだな？」

「僕のじゃないですよ！ ほら、僕の腕はちゃんとあるでしょ！」

「……部屋に戻ってきたら在った？」

「そういつてるじゃないですか、鍵だつてちゃんとかけていきましたよ！ あー、もう怖いなあ、もう」

「……」

と、いうことは、だ。

可能性は3つに絞られることになる。一つ目は、コレが元から此処

にあつたという可能性。矢島が気が付かなかっただけで、ベッドの下とか見えない場所にあり、ヘビが腕と共に移動した。二つ目は、

「僕、ミミズは大丈夫なんすけど、ヘビだけは」

矢島が嘘をついている可能性である。この場合は、警察の罠かもしれない。目的は解らないが、しかし、この腰抜け刑事の怯えようを見ると、その線は薄いように思える。三つ目の可能性は、

「の、のろいだ」

「は？」

「呪いですよ！ ほら、君が又兵衛を殺したりなんかするから！」

「……奴の呪いだつていうのか？」

まさか、あの男は死んだ。

乾は呪いなんて信じていない。こんなことをするのは、生きた人間だけだ。

『なんですか、あなた！』

彼らは気にも留めていなかったが、テレビの電源が点いていた。

『ぎゃあーっ』

耳を突き刺すような女性の悲鳴。

他愛もないドラマだと思っていた。サスペンス劇場か、なにかの

「又兵衛？」

男が土足で家上がり込む。訝しげに声をかけた中年の女を刺した。ギリリと光る出刃包丁。血液が滴り落ちている。

「あ、又兵衛じゃないすか、あれ」

ネズミ顔の男は、さらに悲鳴を聞きつけてやってきた老女までも殺した。あっけなく。本当に呆気なかった。続いているのは、死にかけた人間たちの小刻みな痙攣だけ。男はさらに奥へ進む。なにかを求めているかのように彷徨う。

「これって」

「……うちだ」

乾の実家だ。

まぎれもなく、乾に染みこんだ光景。画面を通すと、不思議に遠く

感じる。が、間違いはない。母と婆ちゃん、そして、
『うわーっ』

「ぎゃ、う、うわあ」

矢島が目を覆う。

殺されたのは、乾と10も年の離れた弟だった。

「これって……これって!？」

殺人中継ビデオ。

まさにそれだ。海外では、スナッフビデオと呼ばれ、アンダーグラウンド世界で出回っているという。嘘か真か。

しかし此処に、確かに、実在する。

世間にセンサーショナルな衝撃を与えた、乾一家惨殺事件の。

「……どうして、こんな」

蛇と腕のことは、とうに頭から消えてしまっていた。恐怖の優先順位の問題だ。

赤い。

『や、やめて』

すべてが赤い。頭の中だけ真っ白で。

『望、逃げて、のぞみーっ』

1104号室に存在している殺人犯と刑事は、ただ呆然と立ちつくしている。

ドアが乱暴に叩かれているのにも気が付かなかった。

フロント「STAFF ONLY」

「犯人の手がかりは？」

「今のところはない」

「探知出来なかったのか？」

「用意してなかった。今させている。」

「急げ。必ずまたコンタクトを取ってくるはず。」

なにこれ。

映画？ ハリウッド映画？

蟹沢ジョージはメトロノームのように、視線を行き来させていた。ふご、とカエルがつぶれたような奇音を発したのは、よく知った顔だ。だみ声の『会長』。声のわりには、ハンサムで整った容貌。

官房長官の門脇マサルじゃん。

マジ？ テレビで見るとより、ガタイいいな。

その向かいの人物は、さらに良い体格をしていた。まるで熊のような

「おい、まだか」

そう、『熊』だ。

野党の第一党のヘッド。名前は… 忘れた。熊、というあだ名のインパクトが強すぎるから。ていうか、どうして、このふたりが俺の職場にいるんだ？

なに、この状況。誘拐？ 身代金だつて？ 映画の撮影だと言われ

た方が、よっぽど納得できそうだ。

「あまり急かすな」

角刈りのサブが鮮やかな手つきで、電話に装置を取り付けている。

あーあ、ホテルのものを勝手に改造しないで欲しい。

壁際には初老の女がのびていた。

剣山を振りかざし、ジョージを襲った山姥だ。

『かくごーっ』

『ぎゃっ』

間一髪というところで『熊』登場。

むんず、と山姥の腕を掴み、腕力で突き飛ばした。その様は、圧倒的だった。初老の女は壁に後頭部を打って伸びてしまった。ジョージは熊のおかげで命拾いしたわけだ。そういえば、お礼いつてなかったっけ。

「あの、」

「ところで貴様。なぜ腕が無い。」

ジョージが口を開きかけたところで、官房長官が云う。

「ちよつとな。気にするな」

「まあ、いいが」

「ちよつと!？」

思わず転けそうになる。そうだ。妙なことに、熊には片腕がなかった。

スーツを被っているから、はつきりとはわからないが、左腕が空だ。風が吹けば、高級そうな生地のみが靡く。左の肩から下が無い。一昨日くらいにテレビで見かけたときには在ったから、それから現在までの間に失ったということになるか。一体なにがあっただろう。

「来た」

門脇が静かに叫ぶ。

金の装飾が施してある受話器を取った。『もしもし』という相手の声も部屋中に響く。そうなるように、調整したのだろう。

『金は出来たか?』

「国家予算額だぞ。そう簡単に用意できるか。」

『はやく用意しないとお』

機械を使用してるような高い声が喚く。難しい顔をしていた熊が、門脇から受話器を奪い取った。

「おい、貴様は誰だ?」

『なつ、そんなこと、言うはずないだろー! ばーかばーか』

「国家予算とか巫山戯たこと抜かしてやがるが、どのくらいの額だか分かって要求してるんだろうな。」

『あ、あたりまえだろお』

「じゃあ、言ってみろ」

『ええと、何兆円とか……』

「はっ?」

『んーっ、もう止めた! 殺しちゃうからな!!』

電話は叩きつけられるようにして切れた。

殺す、という発言にジョージは青ざめた。人質が危ない。

「どうするんですか!？」

「小者だ。なんてことはない。」

「そうだな」

ケロリ、と政府の幹部らはいう。ジョージは目眩がした。
こいつら……

「逆探知、成功しました」

サブが知らせる。

「草区草町5丁目5番地です。」

「うむ。その辺を洗えば、見つかるな。」

「長官、それが」

「なんだ」

「その一帯は、荒地地となっていて、建っているのは民家が一棟のみ。」

門脇と熊が視線を合わせる。

「民家の家主は……」

カタカタとパソコンを叩くサブ。ヤクザとばかり思っていたのに、
ハイテクに強いらしい。

「鍋山タカシ、32歳の男です。」

「……」

行け、と門脇が顎で合図した。

なべやま？

どこかで聞いたことあるような……

ジョージの脇を黒服軍団が通り過ぎる。カラスみたいだ。

記憶を探りながら、ジョージはヒッチコックの映画を連想していた。

t o b e c o n t i n u e d …

ホテルは泊まらない 6（後書き）

次回からは急展開になる…予定でございます。

ホテルは泊まらない 7 (前書き)

1204号室↓? 1203号室↓? 1202号室↓和香子

1201号室↓?

1104号室↓矢島 1103号室↓乾 1102号室↓ナベ

1101号室↓?

フロント↓ジョージ

おすすめポイント

- ・ 矢島の部屋に突如現れた腕と蛇は。
- ・ 誘拐犯の正体とは。

ホテルは泊まらない 7

エレベータ前

和香子は立ち止まっている。

怖い話を思い出していた。

ある〇しが会社で、窓辺のコピー機で山のような書類のコピーをしていたときのこと。ふと窓の向こうを見たとき、ちょうどその瞬間に飛び降り自殺をした男と、ばつちり目が合ってしまった。言葉では説明できない、その目の虚ろさ。あまりのショックで、彼女は一ヶ月も会社を休まなくてはならなかった。

数十分前、彼女の部屋から一人の男が飛び降りた。

和香子は男を背後から見ていただけなので、その瞬間の顔なんて知ったことじゃないが、下の階の誰か、怪談話の〇しみたいに男と目があってしまった人間がいるかもしれない。

（ご愁傷様）

和香子はほんの5ミリほど同情した。

そして、男が追いかけていった着物の帯を回収するため、階下へ向かう。そう、向かっているところだった。ところが、なのである。

「……どうしているのよ」

エレベータ前で腕を組んでいる男。

高級そうなスーツでめかし込んで入っているが、まるで、その顔つきと身体に合っていない。軍人みたいな容姿。和香子はこの男を知っていた。直接会ったことはない、写真を見ただけだが。

ぎゅ、と彼女は拳を握る。約束の時間になっても来ないものだから、尋ねてきたに違いない。もともと、見合いに成功など望んでいないが、ここで発見されれば足止めを食うに決まっている。

ああ、どうしてこうも上手くいかないんだろう？

「ごめんあそばせ」

つ、と目の前を華奢な足首が通った。ジュエリーちりばめられたゴージャスなサンダルを履いていて、視線を落としていた和香子は、思わず顔を上げる。白いシフォンのスカートがゆらゆらと舞っている。姿勢のよい後ろ姿。

(……あ)

エレベータへ向かう、彼女は和香子の見合い相手を通り過ぎようとした。しかし、どういうわけか男が彼女の腕を掴んだ。なにやら話しかけている。

和香子らしき人物を見なかったか、とそのようなことを聞いているのかもしれない。もしくはただのナンパか。

「あ」

和香子は声を上げた。口元を押さえた。

突如、見合い相手が崩れ落ちた。うずくまって腕を押さえている。

和香子は弾かれたように、身を潜めていた壁際から飛び出した。

サンダルのはき物は、男の様子にもかかわらず、何でもないようにエレベータへ乗り込む。

「ぐっ、ああ」

軍人のような男の腕からは血が流れ落ちていた。もはや焦点も定まっていない。

「あなた、ちょっと！」

エレベータの扉が閉まる。

彼女が和香子と目を合わせた。このときの光景を、和香子は一生忘れない。

水晶のように光る髪。滑らかな白い肌に生える血の赤い唇。

これまで会ったことのない恐ろしいほどの美少女が妖艶に微笑んでいた。おまけに、その顔は、国民であれば誰もが見知った顔だったのである。

「ごきげんよう」

聞き覚えのある可愛らしい声で云う。

優雅に手を振る彼女の白い手には、赤い血の滴るナイフが握られて

いた。

1204号室

ドアが蹴り破られた。

殺人ビデオに固まっていた矢島は、ようやく外部からの異変に気が付く。

「…う、うう」

立ち上がろうとするが、膝に力が入らない。

吐き気がして、傍らの乾を伺うと、真っ青な顔色で口を押さえている。テレビの映像も、また膠着していた。

最悪の殺人犯、又兵衛は退去した後で、死体が置き去りにされたままの玄関が映っている。

乾家の長男。

たったひとりの生き残り。

たまたま休日に職場へ出向いていたおかげで、彼は助かったのだ。

いや、『助かった』なんていえるか？ 家族がこんな風に惨殺されて……しかも、何奴の仕業かは検討もつかぬが、此処で彼はその一部始終を見せられたのだ。

「望、くん」

目を閉じている若い青年。

体が震えている。こういうとき慰めの言葉は、なんの足しにもならない。ベテランの刑事ならわかることだ。運悪く、矢島は若く愚かな刑事だった。

「あの、大丈夫、ですか？」

「…だいじょうぶ？」

「えっと、元気を」

「大丈夫なわけねえだろっ！」

「ひっ」

「馬鹿っ、退け！」

乾は獣を蹴散らす迫力で叫んで、部屋を出て行った。

「いてっ」

その衝撃で吹っ飛ばされた、

のは矢島ではない。別の人間だ。矢島はぽかんと口を開ける。

「ちよっと、おっさん」

「…え」

声をかえられ、のけぞる。現れたのは豊満な女だ。腰を押さえながら、起きあがる。胸が揺れる。限度を知らない爆発の無造作ヘア。

「ここに、俺のマイゼルいない？」

「まいぜる？」

「そう。このくらいの、可愛い……あっ、旦那の腕！」

女が放置されたままになっていた腕に駆け寄る。また胸が激しく揺れる。こっちが恥ずかしくなるほどで、矢島は思わず目を逸らした。

「なんで此処に！？ さてはマイゼルが絡みついて、そのまま降りたんだな。うわあ、やっべえ、同じケースに入れとくのはまずかったか」

「…あ、あの」

まるで訳がわからない。

『マイゼル、マイゼル』と女は勝手に矢島の部屋を搜索し始めた。

警察の捜査だつて、ここまで無粋じゃない。

「お姉さん」

「あん？ なんだ、その呼び方。俺のことは、ピエールって呼んでくんな。マイゼール、マイちゃん。ほら、おっさんも探して」

「え、何を」

「マイゼルだよ、あんた。ちつとは文脈読みなよ。子供の蛇、キュートな紫色だからすぐ分かるよ」

「へび！？」

「ピー、ピー、でておいで」

そういえばすっかり忘れていた。

天敵がいたということ。矢島は小学生の頃、蛇に追いかけられて

学校を遅刻したことがある。あの獰猛な目で睨まれると、もう駄目だ。金縛りにあったかのように動けなくなってしまう。

「はっ、ぴ、ぴ、ピ」

「おっさん、口笛も吹けないの？ 情けないねえ」

豊満な女が呆れた表情をする。だが、矢島は口笛を吹こうとしたわけじゃなかった。彼女を呼ぼうとしていたのである。ピエールさん助けて、と。

「ひ、ひい」

矢島の裏太ももを這っている『マイゼル』！

「マイちゃん、出ておいで。好物のお肉食べさせてあげるよ」

呼応したかのように、子蛇がちろりと細長い舌を出した。

もはや限界。

「ん、おっさん？」

偶然か、それとも必然なのか。今夜一番不幸な刑事。

「おっさん！？」

矢島はここで意識を失った。

t o b e c o n t i n u e d . . .

ホテルは泊まらない 7 (後書き)

あけましておめでとーございます。

ホテルは泊まらない 8 (前書き)

1204号室〓熊	1203号室〓?	1202号室〓和香子	1
201号室〓?			
1104号室〓八島	1103号室〓乾	1104号室〓ナベ	1
101号室〓?			
フロント〓ジョージ			

ホテルは泊まらない 8

フロント「STAFF ONLY」

「なんだと!？」

官房長官の門脇が声を荒げる。

「鍋山の家はもぬけの空です。受信機だけがあって、おそらく他の場所から電波を送っているのではないかと思われます。」

「うぬ……で、美濃様は？」

サブは申し訳なさそうに首を振る。

美濃を誘拐した犯人からの電話。逆探知には成功したが、その場所はハズレだった。

「追跡を続ける……くそ、くそ、くそ、」

「門脇、落ち着け」

熊がたしなめるように何度目かのセリフをいうと、門脇の我慢は限界に達したのか、額に血管を浮き上がらせ叫ぶ。

「あと3時間しかないんだぞ! あと3時間でサミットが始まる。」

それまでに美濃様を見つけられなければ!」

傍観者のジョージはその剣幕にひっと飛び上がる。怖い、怖すぎる。

「サミットの場合に美濃様がないということは何を意味するかわかるか!？」

「影武者は？」

「2日前、マガダ国の刺客に殺された」

「……………」

殺された、って。

なんつーヘビーな話をしてるんだ。ジョージはにわかに、彼らの会話の内容を理解していく。とりあえず、皇女的美濃が誘拐されたい。そして……そうだ、今夜は各国の首脳と王族が終結するサミットが開催される日ではないか。

「美濃様はとわけ特別な存在だ。ガーデン国の皇子との縁談が進んでいる今、欠席となると面倒なことになる。」

「誘拐されたと公表するか？」

熊は腕の傷口が痛むのか、顔色も悪く低い声で呟くように話す。

「馬鹿、国中が混乱するだけだ！！」

門脇が容赦なく雄たけびを上げた。

もう沢山だった。もう嫌だ。逃げよう。

拳銃を持った黒服らに囲まれているジョージは決意する。

彼とて、一国民、一社会人として、それなりの自覚は持っている。

はずだ。が、こんな国家レベルのトラブルに自分の意志も関係なく巻き込まれるなんて理不尽すぎる。

「あ！」

黒服たちもジョージへの注意が疎かになっていたのだろう、彼らが気がついたときには、ジョージは敏捷な動きで、スタッフ用の裏口から逃げるところであった。タイムカードなんて押す余裕もなく、とにかくこんな面倒はオサラバだ。

「見なさいよ！　これを！！」

突如、ドスのきいた女の声。

聞きおぼえがあるような気がした。

逃げかけていたジョージは、本能的に立ち止まる。何か、ものすごい事態が起こった、そんな予感がした。

「近づかないで、一歩でも近づいたら、なにするかわからないわよ！」

薄く開いたフロント。

黒服たちは固まったまま。その視線の先に、ふたりの女がいた。

背の高いほうの女が小柄な少女を後ろから羽交い絞めになっている。

首元を押さえている手に握られているのは、鈍く光るナイフ。

はあ、はあ、とナイフを持つ女の息が荒い。

よく見れば、成人式みたいな振袖を纏っている。顔に見覚えがあった。どちらの女も。

「美濃さま！」

門脇のダミ声。

ジョージは、もう逃れるチャンスも忘れて、その光景をあんぐりと口を開けて見ていた。

自分の恋人が国の皇女にナイフを当てている光景を。

*

1104号室

かちゃ、

「！」

扉は半開きになっていた。

しばし入り口で佇む。部屋からは何も聞こえてこない。ただ、窓が開け放たれており、カーテンがふわりふわり、と揺れていた。

「……………」

乾は足を踏み入れる。

バスルームを開いたみる。が、誰もいない。使った形跡さえ見られない。客人が確かにいるというのは、ベッドの脇におかれた古めかしい鞆で推測できた。

鍵もかけずにいなくなるなんて……

数分前。

乾の部屋に突如流れてきた殺人中継ビデオ。乾の家族を容赦なく惨殺した又兵衛の一挙一動。誰が撮影したものなのか。

誰が流したのか。

不気味だった。乾が此处に来ているということを知ってやったとは思えない。何故？ どうやって？ ホテルの備え付けにあるビデオラックは空であり、配線の操作か、はたまた電波ジャックか。

いずれにしても、乾の様子を伺える部屋の周辺にいることは間違いない。

お間抜け刑事、八島の逆隣りの部屋に忍び込んでみたが、人の痕跡はあるものの部屋は無人であった。

ふと、足元に光る物体に気が付く。

乾はしゃがみこんで、それを手にとる。金細工が施してある高級そうな髪飾り。レトロなデザインで、おおよそ普通の洋服に合わせるようなものではない。パーティーか、成人式だったらなじむかもしれないが。

ジリリリリリ……

黒電話の着信音。乾のものではない、サイドテーブルの上に乗っている、青いメタリックの携帯電話が震えている。

放っておくと、留守番電話に入れ替わり、相手の声が流れてくる。

『ぜい、はあ……やばいことになった。別荘の位置もバレちゃってさ、このままだと時間の問題だよ、見つかるのも。あの女、やつぱりオイラたちが扱うにや厄介すぎたかもしれねえ。なあ、ナベちゃん、どこにいる？とりあえず連絡くれよ』

ツーツー

「よお」

「……」

意味不明の伝言に首をかしげていた乾の背後、不意に声をかけられた。

「久しぶりだな、お兄さんよ」

「……」

一瞬にして、冷や汗が背中を伝わっていくのがわかった。ゆっくりと振り返る。

そこには、無粋なサバイバルナイフを手にした又兵衛が立っていた。ドアに体重を預け、まるで玩具みたいにナイフをくるくると回している。

「おまえ……なんで」

数時間前。

ばかな。殺したはずの男。たしかに、この手で焼き殺したはずの男。乾一家惨殺事件の犯人が、

「あんたともう一度やりあいたくって地獄から戻ってきちゃったのさ。なあ、保険屋の兄ちゃん？」

ネズミ顔で下品な笑い声を漏らした。

乾は気絶しそうになるのを必死堪える。

生唾を呑み込むと乾いた喉音が不気味に響いた。

t o b e c o n t i n u e

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1334a/>

ホテルは泊まらない

2010年10月20日14時13分発行